

第六回 丸山眞男文庫記念講演会要旨

社会学者・丸山眞男

アンドリユー・バーシエイ

歴史としての日本社会科学

丸山眞男は多くの方法で描くことができる。しかしこの講演では戦後日本の指導的な社会学者として論じたい。それによって「近代」という進行中のドラマにおいて、丸山だけでなく、日本の社会科学が果している役割に光を当てることができればと思う。

二十年ほど前、戦前日本の「公共人」に関する博士論文を書いていた時 (*State and Intellectual in Imperial Japan*, University of California Press, 1988) として出版。邦訳『南原繁と長谷川如是閑：国家と知識人』(ミネルヴァ書房) 私は一九二〇年代とくに戦後日本の知識人にとって「社会科学」が、呪術的な力をもっていたことに気づいた。正しく理解され実践されればそれは、日本が直面する諸問題(戦前には貧困・不平等・農村過剰人口、戦後には政治社会秩序の全面的民主化)を解決するという。この社会科学には、専門化への動きと批判的統一に向かう動きがあった。両者の相互作用を解明するような

総合的な歴史を書きたいと私は思った。この研究の成果が今年出した *The Social Sciences in Modern Japan: The Marxian and Modernist Tradition*, University of California Press だ。

この本で私は日本を、ドイツや革命前ロシアと並ぶ「環大西洋」からの「発展的疎外」の代表例として論じた。発展的疎外とは後発帝国の徴で、三国が先進帝国に対して自覚した脆弱性の条件をさす。それは「環大西洋」が既に達成した発展のモデルを含んでいた点で発展的であり、モデル国が三国にとって脅威であった点で疎外的だった。この条件が三国の社会科学にとって主な規定要因となった。

この疎外に関わる問題が、日本のマルクス主義諸学派(講座派、労働派、宇野派)や丸山らの「近代主義」にいかに関与したか、これら二潮流が日本の社会科学にどう批判的統一の契機を与えたかを私は論じた。この二潮流は大きな成果をうんだ。それは彼らが世界的貧富の差、都市と農村の差、そうした落差が政治社会文化の面で現われる問

題など、時代の中心課題に立ち向かったことによる。

他方で六〇年代の日本は、都市化とマス化という根本的な変容を受けた。「農村問題」は以前の重要性を失い、企業が国民生活に及ぼす支配は、世界貿易で日本が占めるシェアと同様未曾有のものになった。

「貧困」はその形と在り処を変えてしまった。この事態は、企業一家への奉仕に関わる伝統主義的言辭と民主化された平等に関する戦後のエトスとを結びつけることで正当化された。そしてある左翼的議論によれば、マルクス主義者も近代主義者もその正当化に寄与した点で、世界史的意味をもつ産業ユートピアとして日本を評価する「新日本主義者」と同罪とされた。

普遍と特殊

では近代日本で「社会学者」であることは何を意味したのか。かつて道元や戸坂潤は日本を「辺鄙の小邦」〈世界の一環〉と呼んだ。二人にとって「真の」世界は、人目につかぬ故国ではなく、仏教やマルクス主義のような普遍的運動に捉えられた地球の一部だった。

日本の社会科学の歴史は、普遍による特殊への媒介という主題に要約できる。近代世界への日本の遅れた編入はその一貫した関心事だった。他面それと並んで価値転倒の対抗運動が起った。外からの潮流は日本でこそ完成に達したのではないか、日本は普遍自体が実現されるような特殊ではないか。こうした議論は戦中の京都学派や「近代の超克」論、近年の「文明としてのイエ社会」論を想起させる。これらをイデオロギー的層として片付けるだけでは十分でない。アジアにおけ

る最初の近代強国としての日本の「成功」は未曾有であり、その意義付けはなお残された課題だから。

伊藤博文らによる新伝統主義的な近代化の戦略は、発展的疎外への反応として展開された。丸山は「超国家主義の論理と心理」「日本の思想」でこの戦略を批判している。そして日本社会科学の創成期を特徴づけるのは家族国家論の制覇だった。それは近代日本を考察する試みの引照点になった。「先進」世界から疎外されていた日本は、その内部に疎外された個人の存在を認める余地はなかった。国家と提携しない社会的連帯は国家にとって危険だった。だが国家自体が国民にとって危険になるとき、何が起るのか。

講座派の遺産

講座派マルクス主義は普遍主義的であると同時に、対象の認識では特殊主義的だった。日本資本主義は独特の歪んだ構造をもつとされ、外からの衝撃のみがそれを変えたとされた。そこでこの学派は、最も反対した当の「国体」とその基礎にある搾取体制を概念的に再生産しがちだった。国体が「比類ない」ように「零細農業の半封建制」に基づく日本資本主義も「比類がない」。この見方を示した山田盛太郎の『日本資本主義分析』は戦後にも影響した。

内田義彦、平田清明、丸山眞男らは講座派の線にそって思想的に遍歴し、その射程をこえる難しさと、そこに現われる可能性の両方を証した。内田と平田は、道徳価値の根拠を自称する国家に抵抗して市民社会の観念を発展させた。しかしその観念がマルクス主義の枠内で倫

理的的性格を顕在化させたのは、共産党の思想統制を脱して以後のことだった。

丸山もマルクス主義を通して新伝統主義的な議論を批判し、人間主体の理解不足というその主義の欠点を問題にした。しかし丸山は市民社会の観念には安住しなかった。彼は近代性という言葉に最大の重みを与えた。近代性は丸山にとってあらゆる特殊性を超えていた。彼のいう「他者を他者として、その他において把握する」とは、個人的集団的な自己超越を経験し、自己自身に対して「他者」になることである。社会科学は現世的な超越の理論と実践に関わる。国体のような集団的政治存在論を拒否し、対立を伴いつつ基本的には交渉による解決が可能な自己決定の過程を促すことが社会科学の任務だった。交渉による解決が「近代的事であること」であり、それが政治行為を伴うかぎりで丸山は、市民社会の範疇には安住できなかった。

丸山と「近代」の理念

敗戦から約二十年の間丸山は、東アジア政治思想と政治学プロパーという二重の作業を追究した。敗戦直後に彼が「超国家主義」の論文を発表した頃、読者にとって政治と歴史文化は結びついていて、しかしやがて人々は政治を専門家に委ね、世界は文化を享受できるように安全にされた。これは「政治化の時代」の逆説だった。国家が日常生活の内部に入りこむにつれ、大衆は操作されていることに無自覚になる。丸山はこの逆説を把握し抵抗しようとした。政治研究の科学化がそのために緊急に必要と彼は感じた。

米国との関係

しかし日本の政治学には復活する程の伝統はなく、彼はかなり米国の社会科学に頼った。だが当時の米国社会科学はアメリカ的価値Ⅱ「正常さ」と考えがちだった。他方で丸山はマッカーシズムを批判し米国の社会の偏執症を指摘した。とすれば米国政治学は、彼にとってどんな役にたったのか。

丸山がラスウェルを熟読していたことが重要。二人の間には一連の類似点がある。自由民主制下における不満の時代への関心、エリートとマスからなる社会観とその心理状態への関心、権力による価値配分過程という政治観等。『政治の世界』で丸山が、権力自体の再生産を扱っていることは、政治権力を目的価値とするラスウェルの把握に基づくと思われる。

六〇年代の丸山の著作は、彼が米国の政治科学をフォローしていたことを示す。近代化の経験における「個人析出のパターン」の扱いなど。しかし米国との関係には別の面がある。統治機構に対する民主的コントロールは、非政治的な社会による政治への不断の関与を必要とする。それは自発的結社の行為 action を求める。ペラーはこれを「下からのカルヴェイニズム」と呼んだ。それは米国の民主主義にとっては正常態だったが、日本では否だった。そして丸山は日本の文脈ではラディカルな意味をもつこの行為へのコミットを、日本民主主義のために求めた。その希求は戦後に彼が書いた殆どの政治論に貫かれている。

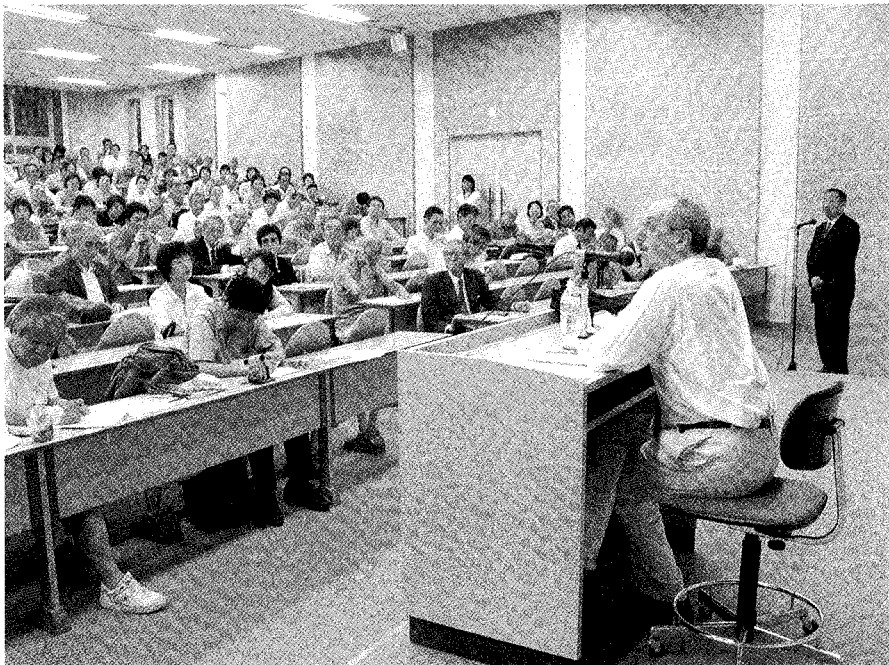
安保後の丸山眞男

六〇年安保に際して丸山は「民主主義の虚妄への賭け」をして敗れた。その後丸山は怒れる学生から批判され傷ついた。これも日本社会がもつ自己変革能力への彼の悲観を深めたかもしれない。彼が政治の世界を自覚する必要をなお感じつつ政治学から離れたのは、そこにも一因があつたのではないか。

以後の彼の仕事は、日本歴史の深部にある意識に向つた。こうした問題設定によつて丸山は、ある人々から「日本回帰」をしたと批判された。しかし丸山は「革命」の必要性を最後まで信じていたと思う。彼は政治等の意識諸形態が歴史の深みから突然「噴出」するという言葉を使うようになった。しかしそれらの諸形態は、戦後日本の民主革命の過程で現われ、その過程を推進することを丸山が望んだ政治的主体性の反対物だった。意識の「深部」へと彼を向わせたのは、世界的過程としての民主革命への関心、日本における市民精神の発展を促す企て、その発展を阻む障害物への彼の感覚だった。

流行の丸山批判は、彼の国民感覚を問題とする。しかし丸山は「ナシヨナリズムの合理化と比例してデモクラシーの非合理化が行われねばならぬ」と書いた。この二つを切り離し前者だけを強調するのはおかしい。非正統的な権威への抵抗は丸山の市民概念で決定的役割を果たしているだけに、この点は重要。

丸山には、超越者なき「永遠の今」という歴史意識が日本では克服されないかもしれぬという絶望感があつた。しかし彼はそうした中でも、理念に依拠する「超越の空間」が権力と文化の狭間に開かれうる



聴衆の質問に答えるパーシェイ氏。講演、Q&A は日本語で行われた

と信じた。「他者としての他者に関する」体系的な知識Ⅱ普遍的な社会科学が探求されるのは、ここにおいてのみだと彼は信じた。彼は正しかったと思う。我々はそうした意味での社会科学以外に、社会がその自己陶醉や暴力的衝動を抑制し、自己変革と更新の能力を開くのを助ける手段をもたないからである。

「講演の論点は多岐にわたり、要約では相当部分を割愛した。全訳が『思想』九六四号Ⅱ岩波書店、今年八月Ⅱに載っているので、参照して欲しい。平石記」

訳・文責 平石直昭

●講師プロフィール●

(東京女子大学丸山眞男文庫顧問)

一九五三年、ワシントンDC生まれ。カリフォルニア大学バークレイ校卒業。日本語で学士号、アジア研究で修士号、歴史研究で博士号を取得。ウエズレイアン大学、ウィスコンシンナーマディソン大学を経て、一九八九年カリフォルニア大学バークレイ校歴史学部スタッフとなり、現在、歴史学教授。一九九五年以来バークレイ校日本研究センター所長を兼務。

〔『東京女子大学学報』五九六号、二〇〇四年一〇月号所収〕